



海外通信 from マラウイ No.4

昨年1月に、国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員として、アフリカのマラウイに派遣された小河原香織さん（市内野上出身）から、4通目のお便りが届きました。

「自立」 小河原 香織



我が家には、2つの果物の木があります。ポポ（パパイヤ）とマボザ（マラウイでも珍しい）。

つい最近まで、土日祝日を問わず、ドアをノックする、窓や家の周りのフェンスをたたく音が鳴りやみませんでした。時にはその果物の木めがけて、石やマンゴーの種を投げつける人たちもいました。私は小学校で活動しているので、そんな小学生の様子を見た近所の幼い子たち、時には大人までもがひっきりなしに家に来ました。任地で知り合った友だちに相談したところ、「あなたはこの土地で初めてのアズング（白人）だからしょうがない」と言われてしまいました。

これまで私は、ずっと、「好奇心を育てるにはどうしたらいいのか」を考えて教育に関わってきたように思います。この1年シャープバレ（任地）の人たちにとって私は好奇心の対象でした。ここでは、テレビもない、本もほとんど見かけることはできません。赴任当初は、私を見たお年寄りはずち止まり、警戒した様子で、挨拶をしたこちらを見返すこ

とも珍しくはありませんでした。学校に限らず、どこかに出かければ取り囲まれて、熱い視線を向けられ続けます。今、ここシャープバレに来て私は、好奇心にも良い面と悪い面があることを、身をもって経験しています。

マラウイは、アフリカでも最貧国の1つにあたります。首都であるリロングウェは、それでも開発がすすめられている印象をもちますが、多くは水道代や電気代を支払える地域に限られます。ひとたび少し首都から離れば、井戸から水を汲み、頭にのせて運ぶ人たちが目につきます。“最初の白人”、今では彼女の言う通りだと思っています。

私たちは、違う。

アズングでもチャンチュン（中国人―首都に行くところと呼ばれる）に似ていても、互いに理解しあえる関係を築くにはどうしたらいいのか。これが、私の今年の目標になりそうです。4月に入り、新しい年度が始まりました。皆さんはどんなことを思っ、毎日を過ごしているのでしょうか。